

魔力を消すだけの転生地味女ですが、
身を引こうとしたら、天才イケメン魔法使い様の閉じ込め溺愛
えっちから逃げられなくなりました

（これでよかったんだ…）

馬車に揺られながら、イリスは何度も自分に言い聞かせた。

今日は王国でも随一の魔力を持つ天才魔法使い、メルキオールと会う約束の日だった。しかし、今、イリスが向かっているのは、メルキオールの家ではない。

メルキオールは魔力が強すぎるが故に、定期的にイリスに魔力を与えることで、その膨大な魔力を安定させていた。だが、問題はその方法なのだ。

（前世でも、あんな濃厚なキス、したことない…）

イリスは自分の唇に触れた。メルキオールの柔らかい唇の感触、魔力が流れ込んでくる熱い感覚がありありと思い出せる。

イリスには生まれた時から、前世の記憶がある。前世では日本という島国で、会社員として、会社と家を往復するだけの毎日を過ごしていた。見た目も地味で内向的な性格で、男性と付き合ったこともない。そんなパツとしない人生を送っていたが、通勤中に交通事故に遭い、気がついたらこの世界に転生していた。

転生した、と言っても小説の主人公のようにチートな力を得られたわけではなく、特別なことといえば、魔力を消す珍しい力があることくらい。

ガタゴトと音を立てる馬車の窓の外には、見慣れた王都の景色ではなく、のどかな田舎道が広がり始めている。

これでいい。王都から離れた実家に帰って、ひっそりと暮らすのだ。

メルキオールは魔力も最近は安定してきているようだったし、自分という道具がいなくなっても、きつとあの優秀なメルキオールなら、何か別の手段を考えるだろう。

そんなことを考えながらイリスが自分の小さな荷物に視線を落としたその時、ふと声が聞こえてきた。

「…僕の許可なく、ずいぶんと遠くまでお出かけだね、イリス。」

イリスは心臓を掴まれたような思いがした。

世界が静止したかのように、馬車の揺れがピタリと止まる。

気がつけば、馬車の中のイリスの目の前の座席に、今一番会いたくない人物が座っていた。

夜の闇を溶かしたような黒髪にアメジストのような紫色の瞳を持つ魔法使い、メルキオール。

「メ、メルキオール様……っ！？なぜ、ここに……！」

「……なぜ、だって？」

メルキオールはふわりと微笑んだ。微笑んでいるはずなのに、目の奥にははつきりと怒りの色が見て取れる。

「君が約束の時間になっても現れないから、探しに来たに決まってるだろう？こんな時のために居場所を観測できる魔法を仕込んでおいてよかった…」

メルキオールはそう言って、イリスの左手を指差す。イリスが驚いて視線を

向けると、そこにはメルキオールの紫色の魔法陣が浮かんでいる。以前、たまには別のところにキスさせて、と左手に口づけを落とされたのを思い出した。

「ねえ、イリス。どうして僕から逃げようとしたの？」

メルキオールの声は穏やかだったが、それが余計に恐ろしかった。返答を間違えば、さらに怒らせてしまうかもしれない。

「…そのつ、メルキオール様の魔力は最近になって随分と安定してきたように感じます。もう私は必要ないかと、思いまして…」

イリスは小さな声で、恐る恐る答えた。

メルキオールはイリスの答えを聞いた瞬間、深く息を吐いた。

「………必要ない、か。なるほどね…」

（………分かって、くれたのかな…？）

イリスは息を詰めてメルキオールの様子を伺う。メルキオール自身が、誰よりも一番に自分の魔力が安定したきたことを感じているはずだ。

黙って逃げ出すようなことをしなくても、素直に関係を終わらせたいと言えばあつさりと承諾してくれたのかもしれない。

「うん、分かったよ。イリス。」

メルキオールはさらに笑みを深めてそう言った。イリスは安心して、話を続けようとする。

「メルキオール様、それでは、もう魔力安定のために会うのは終わりというところで…」

「違うよ。イリス。君が何にも分かっていることが分かったんだ。」

メルキオールはそう言ってイリスの額に指を当てる。

その瞬間、イリスの瞼が重くなり意識が遠のいていく。イリスには魔力を消す力があるが、一度に消せる量よりも多くの魔力を注がれば魔法は通常通りの効果を発揮する。

「…メルキオール様、…何を…」

「いいよ。少しだけ眠っていて。僕の部屋でじつくりと、時間をかけてわからせてあげるから。」

意識を失う前、最後に耳元で聞こえたのは、メルキオールの低く濡れた囁き声だった。

「おやすみ、僕の可愛いイリス。」

イリスの視界が真っ暗になっていく。イリスはそのまま深い眠りについた。



「ん……っ」

イリスはゆっくりと緑色の瞳を開いた。全身を重い倦怠感が包んでいる。

「…ここは…？ そうだ、私、メルキオール様に見つかってしまつて…！」

イリスが目を覚ましたのは、いつもイリスがメルキオールの魔力安定のために訪れていた、メルキオールの私室のベッドの上だった。

黒と紫を基調としたこの部屋には、イリスには使い方がさっぱりとわからない魔法具が整然と並べられている。

（ともかくメルキオール様が来る前に逃げないと…！ とても怒っている様子だったから…）

イリスがベッドから降りようとした時、脚が何かに当たつて、カンつと無機質な音が響いた。

「…えっ？」

イリスが驚いて手を伸ばしてみると、そこには透明な、ガラスのように滑らかな壁があつた。

（これ、結界だわ…！）

よく目を凝らして見てみると、その結界はベッドの四方を囲むように張られていて、天井まで伸びているようだった。

（閉じ込められてる？ あの優しいメルキオール様がこんなことを…？）

イリスは信じられないと思いながら、呆然と結界の壁を見つめる。

「…目が覚めたようだね、イリス。」

低く美しい声が部屋に響いた。

「メルキオール様……！」

コツ、コツ……とメルキオールの靴音が近づいてくる。

「この結界、メルキオール様が施したのですか？なぜ、こんなことを……？」

「なぜ、か……それを理解してもらおう前に、君に逃げられては困るからだよ。」

メルキオールはゆつくりと歩み寄り、透明な結界の壁にすつと手をかざした。イリスの手とメルキオールの手のひらが、透明な結界越しにぴったりと重なり合う。

「……ねえ、イリス。覚えてる？」

メルキオールは紫の瞳を細め、話し始めた。

「僕たちが初めて出会った時のこと。僕が巨大すぎる魔力をコントロールできなくて、優秀な大人の魔法使い達さえ僕に近づけなかった時……君だけが、僕の手を握ってくれた。」

不意に昔話を振られ、イリスは小さく息を呑んだ。

覚えている。幼い頃のメルキオールは、強大すぎる自分の力のせいで、高熱を出したり、暴走しそうになる魔力を副作用の強い薬で抑え込んだりして、苦しんでいた。

「初めて君に会ったあの日、君は僕の手を握りながら言ったんだ。『メルキオール様の魔力、温かいです。きつとたくさんの人を救える、立派な魔法使いになれますよ。』」
「って……そう言って、君は優しく微笑んでくれた。」

メルキオールは結界越しに、イリスの顔に愛おしそうに指を滑らせる。

「あの時からずっと……僕は君が好きだった。初恋だったんだ。僕の魔力を否定せず、恐れずに受け入れてくれたのは、世界中で君だけだったから。」

メルキオールのまつすぐな告白に、イリスの心臓がドキリと跳ね上がる。

（メルキオール様、本気で私のことを……？）

舞い上がりそうになる気持ちをイリスはすぐに理性で抑え込んだ。

前世の世界で20数年、こちらの世界で20年。メルキオールからの告白を素直に受け取るには、イリスはあまりにも長く生き過ぎた。

（メルキオール様の気持ちは嘘ではないのかもしれない。でも、それはメルキオール様がまだ幼くて、狭い世界しか知らなかったからで…）

「メ、メルキオール様……落ち着いてください。それは、当時のあなたが幼くて、たまたま近くにいた私に特別な感情を抱いてしまっただけです。」

「……なんだって？」

「魔力の暴走が落ち着いた今、あなたは私にこだわる必要なんてない。これくらたくさんの素敵なご令嬢との出会いがあるはずです。私みたいな、地味で不気味な力を持った女に囚われる必要はありません！」

イリスは本気だった。メルキオールの幸せを願って、年上として、目を覚まさせようと一生懸命に言葉を紡いだ。

メルキオールは驚いたように一つ瞬きをしたが、次の瞬間、怒ったようにも哀しんでいるようにも見える複雑な表情を浮かべた。

「…………ハハハ…」

メルキオールの口から掠れた笑い声が漏れる。

「言葉で説明して分かってももらえるならそれが一番だと思っていたんだけど…」

メルキオールの紫色の瞳から光が消え、深い闇のような影が差した。

「たまたま側にいたから……？ 素敵な令嬢……？……そうか。イリス、君は僕のこの想いを真剣に受け取めてもくれないんだね。」

「メ、メルキオール様……？」

「もういいよ。」

メルキオールは短く呟くと同時に、結界をすり抜けてベッドの上に向かってきた。イリスは思わず後退りをし、背中が結界の壁にぶつかる。

「言葉で言っても分からないなら、身体に分からせるしかないよね……」

長いまつ毛、吸い込まれそうな紫の瞳。メルキオールの美しい顔が迫ってく

る。

（メルキオール様、すごく怒ってる…でも、メルキオール様のためにも、私では相応しくないことをはつきりと言わないと…！）

「あのつ、メルキオールさまっ…んんっ！？」

逃げる暇など与えられなかった。

メルキオールはイリスの両手に自分の手を重ねて、結界の壁に押し付けながら、唇を塞いだ。

今まで魔力を受け取るためにしていたどのキスよりも荒々しいキスだった。唇を貪るように吸われ、口の中に舌が押し込まれる。

感情が昂っているせいか、繋がれたメルキオールの手がいつもより熱い。

（メルキオール様、こんなに無理にキスしてくるの初めて：んんっ♡）

イリスの小さな口の中に侵入してきたメルキオールの舌が口蓋をなぞった瞬間、ぞくりと甘い痺れが走った。

数えきれないほどキスをしてきたからこそ、口内のどこをなぞればイリスが感じてしまうのかなど、メルキオールはとうに知り尽くしている。どうせならイリスに気持ち良くなつて欲しいから、とメルキオールがそれを探っていたこともイリスは知っていた。

（やだ…♡だめなのに、メルキオール様の舌、熱くて気持ちいい♡）

重ねられた唇からメルキオールの魔力が流れ込んでくる。普段なら、ただ温

かいエネルギーが流れ込んできて、自分の中でそれが消えていくのを感じるだけ。しかし、今日は違った。

「んんん…！？んっ♡んんんっ♡んんんっ♡」

メルキオール魔法が流された瞬間、ゾワゾワ♡と頭が痺れるような快感が走った。お腹の下の方がじわりと熱を持ってしまう、イリスの白い肌が赤みを帯び始める。

（…なに！？魔法を流されただけのはずなのに、身体が熱くなってきて…♡）

「…気づいたかい？イリス。」

「…っ、…うう…♡メルキオール様…いまのは…？」

イリスが息を乱しながら尋ねると、メルキオールはいたずらっぽい笑みを浮かべた。いつもと違うメルキオールの表情にイリスの心臓がトクンと跳ねる。

「君が眠っている間にね……特製の薬を飲んでもらったんだ。魔力を使うと、快感を感じてしまう薬。つまり、僕が君に魔力を流し込めば流し込むほど、君の身体がそれを消そうとして、同時に快感を感じるってことだよ。」

「な……っ！？そ、そんなの……っ！」

先ほど、ほんの少しメルキオールの魔力を流されただけで、ぞわぞわして頭が痺れてしまうような感覚に襲われた。いつものように、魔力を流し込まれたらどうなってしまうのか。

「ふふ、君専用につった薬なんだ。逃げ出そうとしなければ使わないつもりだったのに……僕を置いていこうとした君が悪いんだよ？」

メルキオールは微笑んだままそう言つて、イリスの顎に手をかける。

「メルキオール様、まってください！……んんんッ！」

メルキオールの熱く柔らかい唇が重ねられ、先ほどよりも強く魔力を流し込まれる。

「んんっ♡ンンンッ♡」

ぞくぞくぞくっ♡と背筋を甘い快感が走り抜けて、お腹の底がじんじんと熱くなる。さらにメルキオールは滑り込ませた舌でイリスの口の中をねっとり

と舐めあげた。

ちろちろ♡ちゅむ♡…する…♡

「んんん♡んん♡んん♡んん♡んん♡んん♡」

（これっ、メルキオール様の舌使いと流れてくる魔力の両方で気持ち良くなつて、キスだけで思考がとろけてしまいそう♡だめっ♡メルキオール様を説得して、こんなことやめさせないといけないのに…!）

イリスは首を動かしてメルキオールのキスから逃げようとしたが、顎をがっしりと掴まれていて自由が効かない。

イリスが逃げようとしているのを察したメルキオールは逃げることは許さないよ、とでも言うようにさらに魔力を流し込んで、イリスから抵抗する力を奪

おうとする。

♡(あつ♡またメルキオール様の熱い魔力が流れてくる♡キス、気持ちいい♡)

ちゅう♡ちゅむ♡ちゅる♡れろ♡

「……ふは……っ、はぁ……っ♡」

一度唇が離されると、イリスの口から熱い吐息が漏れ出した。

イリスの頬は真っ赤に染まり、翡翠色の瞳は潤んでいる。そんなイリスの表情を見て、メルキオールはふっと表情を和らげた。

「……本当に可愛いよ、イリス。」

メルキオールは愛おしくてたまらないといった様子で、イリスの頬を優しく撫でる。

「僕の流し込む魔力で、そんなにトロトロの顔になって……君の可愛い身体は、もう僕の魔力を欲しがり始めているんだね。」

「そんなことは……!」

イリスの顔がさらに赤くなる。

（私、今きつとすぐくだらない顔してる。流されてはダメ……!メルキオール様は今少し視野が狭くなっておられる。年上の私がしっかりしないと……!）

イリスは呼吸を整えて、自分を律しようとした。

「はあ…はあ…、お願いです、メルキオール様。こんなことは今すぐやめてください。魔力の譲渡が必要なら、それまではお会いしますから…！」

イリスの言葉を聞いた瞬間、メルキオールの紫の瞳から再び温度が消える。

「イリス、君はあくまでも僕とのキスを魔力譲渡の手段としか考えないんだね…いいよ、それならキス以上のこともしようか…」

メルキオールの低い声が妙に色っぽくて、腰まで響いてジンジンする。

「メルキオール様、キス以上のことって…」

イリスは慌てて聞き返す。前世でも、今世でも、男性経験のないイリスはキスより激しいことなんて、知識としてしか知らない。

「……全身を可愛がって気持ち良くしてあげるってことだよ。」

メルキオールはそう言いながら、イリスの首筋にちゅっ♡と音を立ててキスを落とした。当然ただのキスではない。唇が触れた場所から濃い魔力が流される。

「んっ♡やっ…♡」

イリスの小さな唇から艶っぽい声が漏れ出る。

（そんなところ、キスされたことないのに…メルキオール様、）

「ふふつ、可愛い声が出てきたね、イリス。もつとその甘い声を聞かせて。」

メルキオールは首筋から胸元まで下りながらキスを落としていく。

「…服、脱がせるね。イリスの綺麗な身体、僕にだけ見せて。」

「メルキオール様、いけません…！」

イリスが制止する間もなくメルキオールの長い指先が、イリスの着ている黒いワンピースの胸元にかけられる。

そのままシュミーズごとワンピースをぐつと下にずらされて、イリスの控えめだが形のいい胸が露わにされる。

「…だめです…見ないで、ください…」

イリスは慌てて腕で自分の胸を隠した。女性らしくない身体はイリスのוותコンプレックスの一つだった。

（こんな貧相な身体、メルキオール様に見られたくない。）

「だめだよ、隠さないで。僕によく見せて。」

メルキオールは優しく、しかし抵抗を許さない強さでイリスの両腕を掴んで、結界の壁に固定した。

「メルキオール様、見ないでください…恥ずかしいです…」

俯いて顔を真つ赤にするイリス。しかし、メルキオールは恥じらう姿も愛おしいというように、イリスの姿をじつと見つめて、うつとりと目を細めた。

「恥ずかしいことなんて何もないよ。ああ、イリス、君は本当に綺麗だ…」

吐息混じりの声が聞こえてきて、イリスは照れてしまう。メルキオールとは幼い頃から付き合いだ。メルキオールが心からそう思っていることがわかってしまう。

「ずつと……こうして触ってみたかった。」

メルキオールは自分の顔をイリスの胸に寄せる。そのままイリスの胸の突起に舌を這わせた。

レロ…♡ちゅく♡

「んっ♡あう…♡ふう♡そこは、ぞわぞわ、します…」

「イリス、それは気持ちがいいってことだよ。」

レロレロ♡レロ♡ちゅっ♡

「ああん♡あつ、吸いながら魔力流すの、だめ、です♡」

（胸の先、舐められるだけでもぞわぞわするのに、魔力流されるとお腹の中がきゅぅ♡って動いちゃう♡）

お腹の底がきゅんきゅん♡と熱くなつて、腰がピクッ♡ピクッ♡と動いてしまつて恥ずかしいのに止められない。

力が抜けて、結界の壁に背中を預けるようにして座っていたイリスの身体がずるずると下へ滑り落ちていく。

「ふふっ、イリスの乳首、コリコリになつてきた。気持ちいいんだね？ 反対も同じようにしてあげるね。」

メルキオールはイリスを結界の壁に縫い留めていた手を離し、イリスの反対側の乳首の周りをすりすり♡と触る。

すりすり♡すりすり♡

「あう♡うう♡すりすり、ダメです、変に、なっちゃう♡」

両手は自由になったのにイリスはろくな抵抗もできなかった。

「ふふつ、まだこっちは触ってないのに、ちよつと膨らんでる。僕に早く触ってって言うてるみたいだ。こんなところまで可愛いなんて、君の身体は一体どうなっているの？」

メルキオールはそのままゆつくりと顔を寄せ、反対側の胸の先を口に含んだ。

ちゅう♡ちゅく♡れろれろ♡

「ああッ♡んんっ♡」

すつぽりと口内に含まれると同時に、魔力が胸の先端から身体の奥へと注ぎ

込まれる。

チロチロ♡と舌の上で転がされてドクツドクツと魔力を注ぎ込まれると、イリスは壁に背中を押し付けながらビクツビクツ♡と腰を跳ねさせた。

「んああッ♡♡ひあッ、んんうッ♡だめです♡胸、ぞくぞくしてっ♡」

頭の芯が痺れるような強烈な快楽が背筋を駆け抜ける。

足の先がきゅつと丸まり、秘められた場所がじわつと湿り気を帯び始める。

（もう身体に力が入らない…♡お腹の底が…熱くて、キュンキュンして…っ♡）

イリスはついに完全に滑り落ちて、ベッドの上に横たわる姿勢になった。

黒いベッドのシーツの上に広がる金糸のような髪、乱れた服。その白い肌はメルキオールに与えられた快樂のせいで、赤く染まっている。

イリスを見下ろすメルキオールの紫の瞳に欲望を孕んだ熱がこもる。

「はあ…本当に君は魅力的な女性だね、イリス。ゆっくり時間をかけて気持ちよくしてあげたいのに、止まれなくなりそうだ。」

メルキオールはワンピース越しにイリスの細い腰のラインを長い指でなぞる。

すーっ♡すり、すり…♡

メルキオールの指がなぞるたび、イリスはあっ♡んっ♡と声を漏らしながら身を振り、シーツとイリスの身体が擦れる音が響く。

（恥ずかしすぎるのに、腰ピクピクするの、止まらない♡起き上がりたいのに、もう全然力入らない…）

「あッ♡あああッ♡メルキオール、様……っ♡お、お願い……もう……もうやめて、ください……っ♡♡」

これ以上、この淫行を続けられたら、自分がますます変になつてしまいそうで、イリスは怖かった。だが、イリスの言葉を聞いても、メルキオールはイリスを見下ろしたまま、くすりと微笑むだけだった。

「まだまだだよ、イリス。君の一番熱いところに、僕はまだ触れてさえいないんだから。」

「え……っ、あ……っ♡」

メルキオールの手が、イリスの細く白い脚へと伸ばされる。メルキオールはそのままゆつくりとイリスの片足を持ち上げて膝にキスを落とした。

（あっ♡脚にもキスされてる♡）

イリスは驚いて思わず顔を上げ、その瞬間、メルキオールと視線が合う。前髪の間から覗くメルキオールの紫の瞳が、まっすぐにイリスを見つめ返してきて、その色香に酔ったかのようにイリスは何も言えなくなった。

「…痕、つけるね。君が僕のものだってわかるように。」

メルキオールは膝からさらに上、イリスの内腿のあたりをちゅうっ♡と強

く吸った。それと同時にドクンと魔力が流し込まれる。

「ひゃあ♡ ああ♡♡」

（お腹の熱いところに近いから、魔力注がれるの、恥ずかしいところに響いちゃう♡）

イリスの秘部からとろ…♡、とろ…♡と熱い液体が溢れ始める。

メルキオールは満足げに、イリスの真っ白な肌の上に自分がつけたキスマークが刻まれたことを確認すると、くるくる♡と舌で円を描きながらその痕をなぞり始めた。

（あ♡♡くるくるされるのも気持ちいい♡）

「はあ…肌スベスベだね。イリス、もっと奥まで僕に触れさせて…」

ちゅっ♡ちゅうう♡くるくる♡くるくるくる♡

「あっ♡吸うの、ダメ、です♡魔力もお腹に響いて…♡」

（あ♡これ、もどかしくなる♡一番奥の熱いところ、触って欲しいなんて…
恥ずかしいのに、考えてしまう♡）

メルキオールはイリスのワンピースの裾をたくしあげながら、イリスの内腿に紅い痕をつけていく。

「イリス、言葉では嫌がつてるけど、本当はもっと奥まで触ってほしいんじゃない」

ないの？」

メルキオールが投げかけてきたイリスを試すような、誘惑するような言葉。イリスは首がちぎれそうになるくらい、頭を振った。

「……！違います、そんなはしたないこと……決して……！」

「いいんだよ、イリス。僕の前では、恥ずかしいことも言っていいいし、えつちな姿も、全部曝け出していいんだ。∴反対側も、同じように愛してあげるね。」

「ああつ……や、やあッ♡♡」

メルキオールは反対側の膝の裏に手をかけると、同じように膝から脚の付け

根にかけて、くるくる♡と舌を這わせながらキスマークを刻んでいく。

（メルキオール様の舌が熱くて柔らかくて気持ちいい♡これ、一番熱いところにもされたら私、きつとすごく大きな声を上げてしまう♡）

メルキオールのキスがイリスの脚の付け根にまで上ってくる。メルキオールはつけたばかりのキスマークにちゅつと音を立ててキスを落とすと、イリスのワンピースの裾に手をかけて、ひどく色っぽい声で囁いた。

「君の一番大切なところも、僕に触れさせて…」

「まってください…あっ♡服…」

メルキオールはイリスのワンピースと肌着を腰までめくり上げて、イリスの

秘められた場所を露わにさせる。

（見られちゃった…どうしよう、多分、あそこ、ぐしょぐしょになってる…）

「嬉しい、すごく濡れてる…」

メルキオールの指先がそつとイリスの小さな蕾に触れた。くちゅ♡と卑猥な水音が静かな部屋に響く。

「ふぁ♡ううん♡」

（メルキオール様に触られちゃった…そんなところ、汚いの…）

イリスは脚を閉じようとしたが、メルキオールが両方の太ももをがつしりと

押さえていて、閉じられない。

「イリス、知ってる？本当はここが、一番魔力を注ぎやすい場所なんだよ。」

そろ…♡そろ…♡

メルキオールは壊れものを扱うかのようにイリスの蕾を弱く優しく撫でる。

「んんんッ♡あッ♡」

それだけの刺激のはずなのに、散々焦らされた今のイリスには強すぎた。イリスはメルキオールの指が動くたびに淫らな声を上げてしまう。

「生命を司る、女性にとって大切な身体の部分だからね……」

「まって、メルキオール様、そんなところ、舐めたら…ひゃああん♡」

ぬるりとメルキオールの舌がイリスの一番敏感な部分を這う。クリトリス全体を下から舐め上げるようにレロオ♡レロオ♡と舌を動かされると、イリスは背中を反らせて快楽に翻弄された。

「ひああああッ♡♡あぐう♡メルキオール、さまあッ♡♡」

（あっ♡これまずい♡刺激が強すぎて頭の中、何にも考えられなくなる♡）

「ははっ、可愛いね。クリを舐められるの、そんなに好きなんだ。」

れろお♡ちゅぷ♡くちゅ♡ちゅう♡

メルキオールは低い声で笑いながら、今度は上から下に舐めたり、クリトリ
スに舌を絡ませてちゅううう♡と吸ったりする。どんな触り方がいいのか探
しているみたいだったけれど、正直どんな舐め方をされても吸われても気持ち
が良すぎて、その全てが快楽の暴力のようだった。

「ああん♡ひゃあああ♡あつ、そこ吸うの、だめえ♡んっ♡なめるのもい
やっ♡」

びくっ♡びく♡びくん♡びくっ♡

イリスの意思ではないのに腰がへこへこと動いて止まらなくなる。身体が全
く自分の意思では動かせない。

「むりです♡ あっ♡ もうっ♡ 変に、なる♡」

「いつも冷静な君が、ここを舐められるだけでそんなに乱れるなんて…たまらないね。」

メルキオールはイリスが乱れていく姿に興奮したように、さらに激しくイリスの蕾を責め立てる。

ちゆる♡ れろお♡ ちゅうう♡ にゆるにゆる♡

「はぐっ♡ もっ♡ むりです♡ むりだから、やめてえっ♡♡」

（気持ちいのが止まらない♡ 酸素が足りなくて、何にも考えられなくなりそうで…♡♡）

「うんうん、気持ちいいんだね。そろそろ、ここからも魔力を注いであげるね。」

（あんんっ♡舐められるだけでも、あたまおかしくなりそうなのに…♡そんなところから直接まりよく、入れられたら、私、メルキオール様のこと、拒めなくなる♡）

「メルキオールさまっ、おねがいっ♡もうっ♡おかしくなっちゃうからっ♡」

イリスは敬語で話すことも忘れて、必死でメルキオールに頼んだ。クリトリスがもう限界というようにずっとひくひく♡している。

「うん、おかしくなって欲しくてこんなことしてるんだ。だって、そうしないと、君は僕の愛を受け入れてはくれないから…」

メルキオールはその声は少し哀しそうで、イリスの胸がチクリと痛んだ。けれど、まともな思考ができたのはその一瞬だけだった。

次の瞬間、ドクツとメルキオールの熱い魔力が流れてきて、イリスの頭の中は火花が散ったように真っ白になった。

「あぁっ♡めるっ♡ あっ♡♡まりよく、むりっ♡♡」

（魔力をここから注がれるのヤバイ♡お腹の奥にダイレクトに響いて、奥から熱いのが溢れそう♡）

蜜がじゅわじゅわじゅわ♡と漏れて、その蜜もメルキオールに舐め取られていく。

ひくっ♡ビクビクビクッ♡♡じゅわわわ♡

「はあ、すごい…吸っても吸ってもイリスのえつちな蜜、どんどん溢れてくる。ねえ、イリス、こんなに僕の魔力を注がれて、身体もこんなにトロトロになっている…まだ、僕のものにならないって言うの？」

「だめッ♡ダメですっ♡…っ、メルキオール様あッ♡♡」

もう頭が回らなくなっていて、イリスは訳も分からず叫んだ。とにかく頷いてはいけないと、欠片ほど残った理性で、拒絶の言葉を選んでいた。

「…イリスは本当に頑固だね、それならその邪魔な理性を完全に溶かしてあげる。」

（もう、これ、無理になる♡気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい♡）

腰がビクッ♡ビクッ♡ビクッと止まらなくなつて、お腹の中の熱が限界まで高まつて溢れ出しそうになる。

「あっ♡めるきおーるざまつ♡なにかっ♡あっ♡くるっ♡」

「いいよ、そのまま僕の魔力に溺れて…僕だけのイリスになつてよ。」

ドクンと一際強く魔力を注ぎ込まれた瞬間、イリスは絶頂に押し上げられた。

「ふぁ♡ あぁッ♡♡ あぁぁぁッッー♡♡♡♡♡」

糸で引かれたみたいに腰がきゅうううっ♡と上に上がって、全身が張り詰めてピン♡と伸びる。

ガクツと力が抜けると、痺れるみたいに甘い余韻がお腹で響いて、ひどく甘い息を吐き出すことしかできなくなった。

（ああ♡いまの、なに？ きもちいいがあふれて…）

「はぁ…♡ はぁ…♡」

「僕の魔力を注がれて、イッてしまったんだね、イリス…なんて美しくて、愛おしいんだろう…」

メルキオールは美しい絵画を眺めているかのように、恍惚とした表情を浮かべて、絶頂の余韻で震えるイリスの身体を見下ろした。

「本当に好き…ねえ、イリス早く僕だけのものになってよ。」

メルキオールは縋るような、どこまでも甘い声でそう言う。声は甘やかでも、決して行為をやめてはくれない。絶頂の余韻が残るイリスの身体にまたドクツドクツと魔力を注ぎ始めた。

「まっ♡だめえ♡めるきおーる、さまっ♡からだ、びくびくしてて♡まりよくっ♡ あああっ♡ また、イツちやう♡♡」

（また、すぐあの熱いのきちやう♡あっ♡めるきおーるさまの魔力があつくてっ♡ ああ♡そんなに注がれたらうけとめきれない…♡）

メルキオールはぬちゅゅううう♡れろれろれろ♡と貪るようにイリスのクリトリスに吸いつきながら魔力を注ぎ続ける。

「イクっ♡また、イッちやうううッ♡」

「うん、何回もイッていいよ、イリス。」

「ひゃああああ♡ あああ♡♡ひいああああッ♡♡♡」

イリスの膣口から蜜も潮もぷしやああと溢れ出した。メルキオールから注がれた魔力が多すぎて、すぐに消しきれずに、快感が暴れ回る。

（あああ♡♡メルキオール様のまりよく、なかなか消しきれない♡これ、

ずっと気持ちいいのが続いて…あつ…本当に、これ以上はむり、かも…♡

イリスは長い金髪を見出しながら、壊れた人形みたいに腰をビクビクとさせる。

（もう…魔力の使いすぎで…意識が…）

「はっ……あ……っ♡」

体の痙攣が収まらないまま、視界がどんどん暗くなっていく。カクン、と首の力が抜け、イリスはそのまま、疲れ果てて眠るように意識を失った。

「……………イリス？」

メルキオールはイリスの名を呼んで、頬に触れるが反応はない。イリスが意識を失ったことを確かめて、メルキオールはゆつくりと身体を起こした。

「一度に魔力を注ぎすぎたね…ごめんね、イリス。」

メルキオールは自身がつけたイリスの脚のキスマークを指でなぞる。メルキオールの執着を表すかのように、イリスの脚には数えきれないほど、メルキオールがつけた痕が残っていた。

「イリス、僕は魔法でも薬でも、どんな手を使っても君を僕のものにする。絶対逃してあげないから、覚悟してね。」

メルキオールはイリスの衣服を整えて、丁寧に布団をかけると、ベッドから

降りて立ち上がった。

「……少し休んで、イリス。また目が覚めたら、僕がどんなに君を愛しているか……嫌になるほど体にも心にも刻んであげるから」

耳元でそつと囁くと、メルキオールは名残惜しそうにイリスから離れた。

メルキオールが部屋を出ると、扉が魔法で自動的に閉まり、カチャンと音を立てて鍵がかかる。

結界と魔法で閉ざされたその空間には、イリスの、小さく規則正しい寝息だけが静かに響き続けていた。